

# 大津 歴博 だより

2004  
No.53

企画展

— 湖国の風光・日本の情景 —

## 近江八景

The Eight Views of Ōmi

歌川広重 近江八景（朝大堂船）墨村保用 本紙蔵

歌川広重 近江八景（晩景船）北浜喜望 本紙蔵

伊東深光 近江八景 望出津野望 本紙蔵

伊東深光 近江八景 舟鴨 本紙蔵

2月27日金—3月28日日 大津市歴史博物館

## 企画展

# 「近江八景」

―湖国の風光・日本の情景―

はるかに広がる湖水を舞台に、変化に富んだ四季折々の姿をみせる琵琶湖。その日本最大の湖は中国の洞庭湖に見立てられ、水墨画の好画題・瀟湘八景を本歌とした近江八景が選定されました。そして、近江八景は江戸時代には、日本を代表する名勝として、屏風・絵巻・浮世絵・版画・工芸等に盛んに描かれるようになります。その広がりには、今日の我々が想像する以上に多

彩でした。王朝趣味あふれる雅な大和絵・蒔絵の八景に都人は詩情を寄せ、賑やかな名所風俗を描いた屏風に町衆は行楽地の華やかさを満喫し、抒情性あふれる広重の浮世絵・版画に旅人は旅情を誘われたことでしょう。

本展では、近世・近代の絵画・工芸作品にみる近江八景を紹介するとともに、雪月花をはじめとした日本人の情趣が盛り込まれた近江八景にもスポットをあてます。四季の風情あふれる日本画作品を八景作品に添えることによって、日本人なじみの深い情景が凝縮された近江八景の風光が浮かび上がってくることでしよう。

する前後の時代には、屏風に描かれた近江名所図が少なからず制作されました。本コーナーでは、湖国を舞台に、社寺の景観や祭祀に群集する人々、さらには街道や港の賑わいなど、活気に満ちた庶民の風俗を描いた屏風作品を紹介します。

### 雅な近江八景

#### ―公家の和歌絵巻―

現行の近江八景にみる名所と情景の取り合わせを歌に詠んだのは、五撰家の公家・近衛信尹（一五六五―一六一四）とされています。そのケースに象徴されるように、八景は漢詩や和歌のテーマとして、教養ある人々の階層において愛着を持た



近江名所図屏風 本館蔵

一七世紀の土佐派・狩野派の屏風・絵巻から幕末の歌川広重の浮世絵版画、そして二〇世紀の伊東深水にいたる六〇件あまり、一〇〇点以上の作品によって、湖国の風光・日本の情景を辿ります。

### ◆主な展示コーナーと出品作品◆

#### 賑わう近江八景

##### ―名所風俗の屏風―

絵画のテーマとして近江八景が定着し始めたのは、一七世紀も後半を過ぎた頃でした。八景が定着



吉田元陳 近江八景画卷のうち堅田落雁 個人蔵

れた文芸世界の名所テーマでした。本コーナーでは、文芸サロンを形成した公家たちが近江八景の和歌を寄せた絵巻の世界をご覧ください。

### 八景を巡る

八景を巡る華やかな屏風や雅な絵巻など、富裕層に鑑賞されてきた近江八景の絵画世界も、一八世紀の半ば以降、状況が変化します。庶民の間に旅行や物見遊山などの行楽が定着するに伴い、『名所図会』と呼ばれる旅行メディアも飛躍的に発達します。そのなかで、近江八景も、実際に訪れる観光名所として庶民の間に広まり、浮世絵版画に盛んに描かれました。本コーナーでは各八景ごとに作品を集め、素朴な描写、異国的な表現、そして臨場感あふれる広重作品や近代の詩情に満ちた伊東深水へと、時代とともに進化する名所絵表現を辿ってみます。

休館日 月曜日

会場 企画展示室A

観覧料 一般 600円 (480円)

高大生 500円 (400円)

小中生 400円 (320円)

(-)内は、15名以上の団体、前売、市内在住の65歳以上の方、市内在住の障害者の方の割引料金



歌川国虎 近江八景 唐崎夜雨 草津市蔵



栄松齋長喜 近江八景 粟津晴嵐 本館蔵



伊東深水 近江八景 三井寺 本館蔵



歌川広重 近江八景〔保永堂板〕石山秋月 本館蔵

## 絵はがきで見る琵琶湖と大津

■ 2月17日(火)～4月11日(日)

日本で通常ハガキ(官製はがき)が初めて発行されたのは、明治六年(一八七三)のことですが、絵はがきが分類される私製はがきの制式が告示されたのは、明治三十年(一九〇〇)のことでした。これ以降、様々な絵はがきが製作されました。時代を通じて、絵はがきの主流を占めるのは、観光絵はがきです。旅先から親類や知人にその場所の様子や無事を伝えるため、また、家庭にカメラが普及する以前は写真代わりに、訪れた場所の様子とともに旅の思い出を封じる役割をこれらは果たしました。さらには、絵はがきは観光だけではなく、建物の完成や催し物の記念、時には災害記録としても制作されました。

本展では、近江八景や島めぐりなどの、大津や滋賀県の観光を代表する絵はがきをはじめ、梅仙窟(本号学芸員ノート参照)などの、今では現存しない施設や建物の完成の際に制作された絵はがきなどを手がかりに、当時の景観や人々の生活の様子を紹介します。



三井寺停留場絵はがき 大正11年頃 個人蔵

## 「古都・大津歴史シンポジウム」を開催

十一月二十二日(土)、大津市生涯学習センター・多目的ホールにおいて、古都・大津歴史シンポジウム「近江・大津になぜ都は営まれたのか」(おとふのみや、しがらみののみや、ほろのみや)大津宮・紫香楽宮・保良宮」を開催、四〇六名の参加者がありました。これは、大津市が古都保存法による国の古都指定を受けたことを記念し、古代の大津・近江に都がおかれた謎をさぐるうとしたものです。

まず、「大津宮 錦織 遺跡(大津宮)・石山国分遺跡(保良宮)」「大津市教育委員会・須崎雪博氏」、「膳所城下町遺跡(禾津頓宮)」「滋賀県文化財保護協会・大崎哲人氏」、「宮町遺跡・鍛冶屋敷遺跡(紫香楽宮)」「信楽町教育委員会・鈴木良章氏」について、スライドを交えた最新の発掘成果の調査事例報告が行われました。

つづいて、基調講演として、「古代近江の宮都論 渡来人と渡来文化をめぐって」(井上満郎・京都産業大学教授)、「大津宮とその時代」(林博通・滋賀県立大学助教授)、「紫香楽宮とその時代」付、禾津頓宮・保良宮」(榮原永遠男・大阪市立大学大学院教授)、「歴史地理学から見た近江の宮都」(金田章裕・京都大学大学院教授)といったテーマで、近江・大津の古代宮都の構造や歴史と特質等が、歴史・考古・地理学等の各専門の立場から論じられ、最後に、討論として、参加者の方々の質問への回答を中心に、四先生から補足説明がありました。近江遷都の理由については、朝鮮半島との国際関係の重視や東山道の重要性などが指摘され、長時間にもかかわらず参加者は熱心に聞き入っていました。

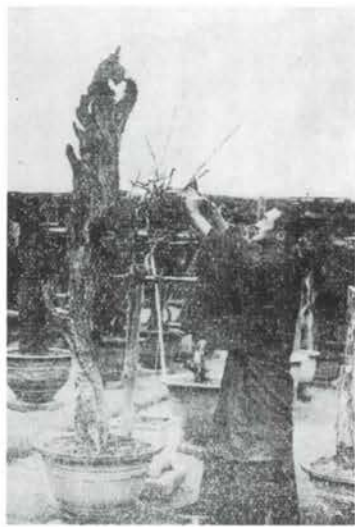
なお、このシンポジウム記録は、三月上旬に刊行の予定です。

長浜では、毎年春を告げる行事として、長浜盆梅展が開催されています。昭和二十七年（一九五二）から始まった同展は、全国から多くの観光客が訪れています。実は、大正から昭和にかけて、大津の膳所においても毎年盆梅が公開され、多くの人々で賑わっていたのをご存知でしょうか。

盆梅が公開されるようになったのは、大正の初め頃で、膳所中庄の生駒晴彦氏が丹精込めて育てたものを「梅仙窟」と名づけた自宅で開催していたものです。当時の大津のガイドブックには、必ずといっていいほど紹介される著名な施設でした。

『滋賀県人名名鑑 上巻』（滋賀日出新聞発行）

生駒晴彦氏（滋賀県名士録）昭和四年発行



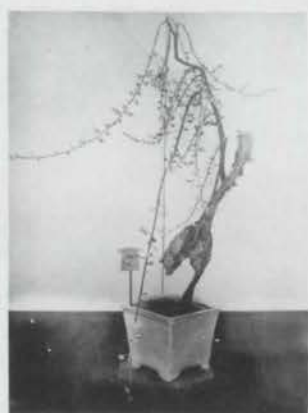
昭和五年刊）によると、生駒氏は「盆梅に於て日本の元祖といふべき」人物と評されています。

盆栽は、江戸時代には大名を始め、商人や町人など広く楽しまれるようになり、盆梅についても、そのジャンルとして多くの愛好者が存在したようです。膳所においては、元々、膳所藩の藩主であった本多侯が、代々菅公（菅原道真）の崇敬者であり、藩主はもとより藩士はいずれも盆梅を作って愛玩していたようです。明治以降、これ

らの趣味も廃れますが、生駒家では先代の秀逸氏が、伊賀や大和に出かけて蒐集し、その後、晴彦氏の栽培により、百数十鉢までに増やし、毎年二月から三月に一般に公開するようになりました。盆梅は、当時多くの参拝客で賑わった、膳所の稲荷神社の初午祭にあわせて開花するように調整されていました。

当時、毎年多くの人々で賑わった梅仙窟の盆梅ですが、晴彦氏が亡くなったことをきっかけに、昭和七年を最後に公開されなくなりました。その後、盆梅は日本画家の山元春挙の世話により、す

梅仙窟絵はがき 個人蔵



（梅野） 丸 蟬

窟仙梅駒生所膳州江

べてが当時大谷にあった料理旅館「八新」に譲渡されましたが、同旅館の移転や廃業により散逸してしまつたようです。

現在、博物館では、今年夏に家族旅行をテーマとした展覧会を企画し、昭和三〇年代にあった大津の観光・レジャー施設の写真や資料を集めています。梅仙窟については、時代が遡りますが、詳細について紹介する予定です。また、当時配布されていた梅仙窟絵はがき（写真）は、ミニ企画展「絵はがきで見る大津」でも展示します。

（木津 勝）

## 頼山陽書状 岩崎鷗雨宛 一四通 本館蔵

江戸時代後期の儒学者で、『日本外史』の作者として知られる頼山陽（一七八〇〜一八三二）が、大津の富商岩崎鷗雨に宛てた書状集。当館所蔵のものは、卷子仕立てで、一四通が貼りこまれている。巻頭には、近江国出身の漢詩人小野湖山の題字があり、亡くなる前年、明治四二年（一九〇九）の書であることが記述から分かる。また巻末には、頼潔の跋文が付されているが、それには「己酉之二月（明治四二年の干支）」とあることより、卷子装とされたのは、この年であろう。

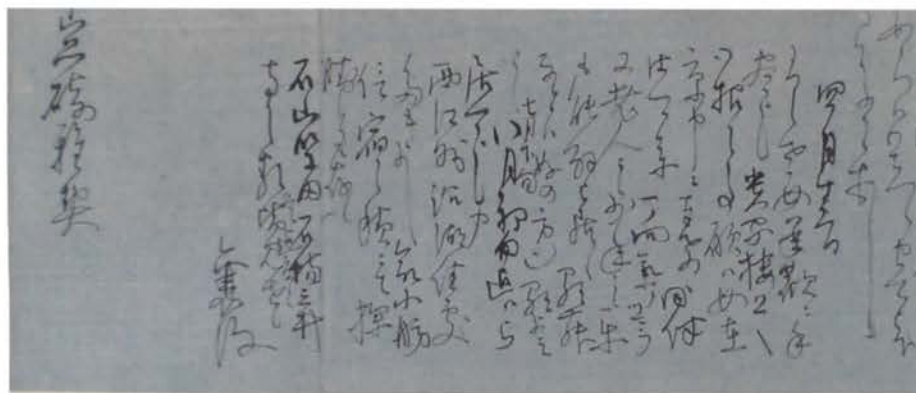
さて頼山陽は、大津の文人たちと親密なつながりがあった。たとえば瀬田橋本に住む膳所藩の郷代官磯田蓮翁は文墨を好み、山陽を始めとする京坂の文人たちと盛んに交流していた。また同じ橋本の名家中川希雲（六左衛門）も、和歌や俳諧をよくし、また珍木の蒐集家として知られた。山陽は天保三年（一八三二）、最晩年の年に中川家を訪れ、希雲が前年の瀬田川渇水時に入手した唐橋の柱の古木に「蠡山」と命名し、その由緒を述べた一文を古木に朱書した。

さて岩崎鷗雨であるが、彼は坂本町（現浜町付近）に住み、代々米商として唐津藩小笠原家など

の蔵元を務めていた（屋号は川村屋）。鷗雨の屋敷は背面が琵琶湖に接し、臨湖楼と称する一樓が設けられていた。頼山陽は文政七年（一八二四）、母をとめない、湖南の石山・瀬田に遊んだが、文政十二年には岩崎宅を訪れ、湖上の舟遊びや観月を楽しんだ。写真下（追伸部分）は、四月十三日とあるのみだが、内容から、右に触れた文政十二年のものと思われる。

尚々、老母承欲に手尽申候、貴家楼上へ御招之事、願候、母在京中に奉希候、同伴仕可参、一向気ノツマラヌ老人に候、少年之楽も能解被居候、歌舞などは好之方也、歌よみに候、七月下旬、八月初旬迄は被居可申カ、西江州、沿湖佳処多きよし、命小舫、信宿之積にて探勝とも存候、石山・堅田・石場・三井寺の類、是迄度々皆見せ候

山陽は、鷗雨と初対面の母を「一向気ノツマラヌ老人」であり「少年之楽」もよく解する人物と紹介しており、「信宿（連泊の意）」の積もりとも、また石山・堅田・石場・三井寺などは皆見せると書き添えるなど、兩人の親密な交流の様子が、文面から伝わってくる。（樋爪 修）



頼山陽書状 岩崎鷗雨宛（部分） 文政12年4月13日付

大津歴博だより No.53  
平成16年2月20日

大津市歴史博物館  
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100  
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>